

# 立命館高等学校 Super Global High School (SGH) の目指すもの

## 立命館高等学校 SGH 推進機構

((代表) SGH 推進機構長 神野哲次 (立命館中学校・高等学校))

### 0. 要旨

急速に進展する社会のグローバル化にあわせて、教育のグローバル化が叫ばれている。これまでグローバル化の先頭を切ってきた立命館に対して、大学へも附属校へも大きな期待が寄せられている。グローバル教育を展開する上で大切なことは平和教育をその根幹に据えることであり、それは「平和と民主主義」を教育理念としている立命館にとって、さらに重要な意味を持っている。

立命館高等学校では、今年度からGL (Global Learning) コースが動き出した。平和な社会の実現に向けて行動できる高校生を育てたいという願いからの設置である。同時に、文部科学省からSuper Global High School (SGH) の指定を受けた。GLコースの生徒を主対象として「平和な社会の実現に貢献できる人材の育成を目指す教育システムの研究開発」をテーマとし、「貧困と災害」を題材に高校生による国際的課題研究を行うことを中心に据えている。

ここでは、GLコース設置とSGH申請に関わる本校の思いをまとめ、同時にSGH活動の一環として動き出した各種平和研修実践の報告を行う。

### 1. これまでの平和教育の取り組み

「平和と民主主義」を教育理念とする立命館の一員として、本校では平和を願う思いを大切に、日常の教育活動においても常に教育の根幹に据えてきた。そして、非暴力の姿勢を貫き、生徒による民主的な自治活動を大切に学校運営が行われてきた。また、国際平和ミュージアムを持ち、アジアの問題を科学する立命館アジア太平洋大学を創立してきた立命館を誇りに感じる生徒へと育てることが、平和への貢献の心を育てることにつながると考えてきた。

教科教育や道徳教育において平和を扱うことも多くあるが、ここでは、大きな取り組みとして毎年実施してきた2つの平和学習を紹介する。

#### (1) 沖縄平和学習

1989年度から1999年度までの11年間、中学3年生の修学旅行において沖縄での平和学習を取り入れてきた。日本国内で唯一地上戦が行われた沖縄の辛い歴史を目の当たりにすることで、平和の大切さを学ばせたいと考えての実施であった。現地での平和講話や壕の見学、ひめゆりの塔での平和の誓い等を行っていた。

2000年度から中学校での修学旅行を海外研修 (2005年度まではニュージーランド・オークランド、2006年度からはオーストラリア・アデレード) に切り替えたため、沖縄での平和研修は中止となった。しかしながら、これまで沖縄の方々と強いネットワークを築き、また、ひめゆり部隊の生存者である宮良ルリさんが中学生へ平和講話をされる毎日放送の特集が組まれた際に、本校においてお話をさせていただく機会を持っていたこと等、沖縄とのつながりは深いものであった。2000年度以降も、沖縄についての平和学習を何らかの形でつなげていくことが本校の社会的使命と考え、沖縄戦を取り上げた映画鑑賞、国際平和ミュージアムでの学習とともに、ひめゆり平和祈念資料館の方を招いての平和講話を行ってきた。また、高校修学旅行において、沖縄の大学生と平和についての討論をする機会を持つ等、断続的ではあったが沖縄とのつながりを継続してきた。

このような経緯もあり、2011年度からは対象学年を中学2年生として2泊3日の沖縄平和学習を再び実施することとした。ひめゆり部隊生存者の方々がご高齢となり、京都まで来ていただくことが難しくなったこともあり、壕での体験等とあわせて現地で平和講話を行うという取り組み内容で再開した。当然ながら、現地での体験は生徒たちの心に深く刻まれている。

#### (2) 海外ボランティア研修

2005年、本校の創立100周年を記念して、海外ボランティア研修をスタートさせた。多くの方々から支援をいただいた創立100周年記念募金の一部を原資として、中2から高3までの在校生全員に取り組みせる「国

際エッセイコンテスト」によって生徒を選考し、海外でのボランティア体験を通して、平和な社会を考えさせる機会とした。取り組みの内容は、帰国後の国際理解講座において全校生徒の前で発表され、本校の平和学習の大きな柱となっている。最初の3年間は、アメリカ、カナダ等において、貧困をテーマにした取り組みを中心としたが、2007年度からは研修先をベトナム、カンボジア等へ変更し、戦争とともに貧困を考える内容とした。開始当初は5年間の実施として計画されていたが、生徒への教育効果の大きさに鑑み、教育後援会の支援を得て、その後も継続して実施している。とりわけ近年では、独立行政法人国際協力機構（JICA）の協力を得て、平和、貧困、ボランティア等についての学習を充実した内容で実施できるようになってきた。このような国際的な取り組みを通して、生徒たちには平和について深く考えることの重要性を認識し、広い視野で物事を捉える等の成長が見られる。

## 2. 平和教育の変貌

10年、20年前と比べ、現在の学校教育における平和教育が大きく変わろうとしている。それは生徒たちを取り巻く環境、とりわけ世界とのつながりが一変したからである。インターネットの発達、交通機関をはじめとするインフラの加速度的な発達が中高生の日常生活へ世界を一気に引き寄せた。例えば、立命館中学・高等学校が2013年度1年間に海外派遣した生徒数は長期短期あわせてのべ693名、海外から受け入れた生徒数は295名である。また、立命館中学校では3年次に全生徒がオーストラリア・アデレードで2週間のホームステイを体験するAA研修を実施している。さらには、多くの海外校とのネットワークも持ち、教育交流協定を締結している海外校は10校、それ以外にも日常的に交流のある学校を含めると30校以上になる。これらの学校間ではお互いに活発な交流が行われており、積極的に海外研修に参加している本校生徒の中には、タイで会った韓国の生徒とオーストラリアで再会したというような、まさしく世界が身近にあるという経験をしている生徒も少なくない。

本校において、海外研修に参加しない生徒にとっても、校内での海外生徒との交流機会は豊富にある。上記のように本校では長期留学生の受け入れも積極的に行っており、常時数名の海外生徒が教室で机を並べている。また、海外校を招いて実施するScience Fairも11年間続けてきた。今では毎年20カ国・地域、30校程

度から120名ほどの海外生徒が参加する規模となっている。さらに、一昨年度からは中学生を対象としたFairの開催も開始し、中学時代に本校を訪れた生徒が、再度Science Fairへ参加し本校生徒と再会するということが始まっている。また、インターネットを介した生徒のつながりはさらに大きく加速されている。日常的に多くの海外生徒とネットを通じた交流を行っている生徒もどんどん増えてきている。

このような社会状況の変化の中で、生徒の日常生活は常に世界と結びついている。文字通り、遠く離れた世界のどこかの小さな問題があたりまえに影響してくる環境で生活をしているのである。このような生徒たちへの平和教育がこれまでのものから変化するの当然であろう。かつては、平和を脅かす世界の現状を知らせることと、世界平和実現のための大きな思想を持たせることによって、将来平和へ向けて努力してくれる素地を作ることが重要であったと言える。現在の生徒にとっての平和教育は、すべての生徒の日常のあらゆる言動が世界の平和と関わるということを意識させること、さらには、思想や願いだけでなく、現時点での行動を伴うものである必要が出てきていると言える。様々な教育が平和教育とどのようにリンクしているのかを再考し、将来の大きな行動のための小さな一歩を経験させることが必要である。

## 3. GLコース設置の狙い

本校では、2013年度入学生から教育システムを変更した。新カリキュラムにあわせての変更であるが、折しもこの学年は立命館小学校から進学してきた第1期生の学年でもあり、立命館アイデンティティーと小学校からの英語教育が活かされることを大きく意識した変更でもあった。高校2年次から国際系コースとしてGL（Global Learning）コースが設置された。GLコースは英語学習や国際交流を重視している、いわゆる国際系のコースにとどまらず、「平和と民主主義」を教育理念とする立命館であるからこそ、平和へ積極的に関わる多くの優秀な人材を輩出したいと願っての設置であった。世界の時事問題に高い関心を持ち、平和を愛する深い思いと平和の実現のために行動できる力を養成したいと考えてきた。また、平和を脅かす不安要因に立ち向かう姿勢を高校生時代から強く意識することで、将来の平和実現への貢献を願う思いを高められると考えている。将来、立命館大学国際関係学部や立命館アジア太平洋大学での学習や研究を視野に入れ、

これらと連携して社会科学素養を養成することが第一義と考えている。

GLコースのカリキュラムの特徴として、以下にくつかを紹介する。

2013年度入学生から、(他大学進学を目指すMSコースを除く)文理すべてのコースのカリキュラムにおいて、高校2年、3年次で「課題研究」を置くこととした。今後、社会で求められる力として、探究心や創造性が大きく重視され、12年間取り組んできたSSH (Super Science High School) 研究開発においても、「課題研究」によってこれらの力が伸張されたことを確信している。この実践を踏まえて、GLコースにおいては国際的な課題をフィールドにした課題研究に取り組ませたいと計画してきた。

また、本校独自科目である「現代社会システム」や「国際比較文化研究」では時事問題への意識や国際感覚を養うことを目的とし、「グローバルサイエンス」では環境問題や生物多様性等について広く学ぶことで持続可能な社会の実現を目指す活動を推進していきたいと考えている。

さらに英語教育では、「グローバルイングリッシュ」「イングリッシュ・ディスカッション」「イングリッシュ・イマージョン」等の科目において、国際舞台での議論や交渉ができる力を養う。同時に、選択科目として「中国語」の学習も行うことができるようにしている。

中学3年、高校1年次ではGJ (Global Junior) と呼ばれるクラスが2クラス程度おかれ、カリキュラムは他と同じではあるが、GLコースへつながるよう英語教育の充実と豊富な国際体験が得られるよう工夫している。初年度である2014年度は、GLコース生徒数は37名。2年目となったGJクラス選択者は、高1で77名、中3で30名である。

#### 4. SGH申請への思い

文部科学省は2014年度からSuper Global High School (SGH) 事業を開始した。グローバルな社会に対応できる人材育成を目的にした取り組みであるが、ここでは、英語教育や国際交流だけを目的とするものでなく、国際社会や国際的ビジネス分野での生徒の課題研究を支援する事業として位置づけられている。

本校では、2014年1月に開催された説明会を受け、GLコース開始の年に、まさに同じ目標に向かえるこの事業へ応募しようと動き出した。申請への研究開発

課題は、GLコース設置目標をそのままに、「平和な社会の実現に貢献できる人材の育成を目指す教育システムの研究開発」とした。同時に、生徒に取り組ませる課題研究テーマとして、平和の実現のために貢献できる高校生を育てるために何が適当かを議論した。平和を脅かす不安要因としては様々なものがある。社会構造等の人為的要因としては「紛争」、「不況」、「宗教問題」などがあげられるが、高校生が実際の行動を伴って取り組むことのできる課題としてはいずれも困難なものばかりである。その議論を経て、私たちは将来これらの問題に取り組む素養を育てる切り口として、「貧困」を取り上げることとした。それを通して平和を愛する思いや社会的弱者からの視点を高められると考えたのである。一方、人為的要素を含まない課題から「災害」を取り上げ、これに対しては災害防止のための計画性や行動力を大切にしたいと考えた。東日本大震災を受けて、本校では生徒会を中心に支援活動の輪が広がっており、毎年Warm Heartという取り組みで全校生徒や近隣の方々に呼びかけた取り組みを行っている。また、本校のフィリピンでの交流校が2013年秋のハリケーンで大きな被害を受けたことで、本校のボランティア団体 RIVIO が全校生徒へ呼びかけて募金活動を行った。これらをはじめとして、「災害」は生徒にとって行動が伴う課題としての意義が大きいと考えている。そして、研究開発の仮説を以下のように設定した。

仮説Ⅰ： 「貧困」の撲滅を課題研究として取り組むことによって、社会的弱者からの視点をもち、世界の平和実現への使命感を高められる。

仮説Ⅱ： 「災害」の防止や被災者への援助を課題研究として取り組むことによって、国際社会における行動力や計画性、リーダーシップを養うことができる。

仮説Ⅲ： 海外生徒との共同課題研究を実施することにより、グローバルな視点と協調の姿勢を育み、国際舞台で活躍する夢を具体的に描けるようになる。

仮説にもあるように、平和を愛し、社会的弱者からの視点を高めることと、それらを行動に移すことができる力が重要と考えている。これらの資質は総合的に養われていくものであることは当然であるが、シンボリックなテーマとして掲げた「貧困」と「災害」について、「貧困」は平和への貢献の使命感、社会的弱者

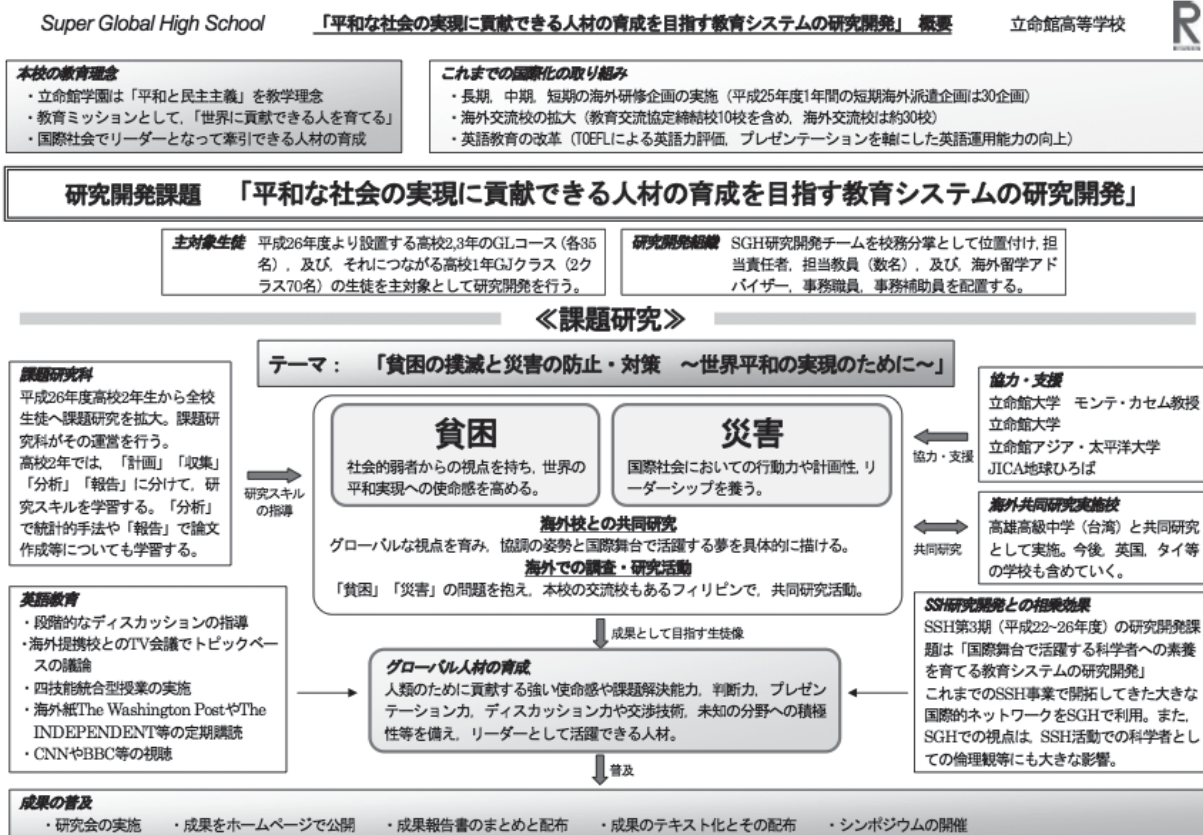


からの視点を育むことを意識的に教材化すること、また、「災害」は生徒の行動力や計画性を養うことを意識的に教材化することによって、大きな教育的効果をあげられると考えている。実際には、環境問題のように人為的要素とそうでない要素が混在するような課題も多いが、「貧困」と「災害」をシンボリックなテーマとして取り上げることは、研究開発を教材化することを考えるとき意義が大きいと考える。

また、今後の国際社会で活躍していくためには、国を超えた協調の意識が重要であり、それを得られる教育手法として海外校の生徒との共同課題研究を取り上げた。その中でより協調の姿勢を養える実施方法を定式化する研究開発を目指したい。

これらの仮説を確認し、それらが高いレベルで実現できる教育システムを構築したいと考えている。

## 5. SGH研究開発の概要



## 6. SGH初年度の実践報告

### (1) 今年度SGH活動の全貌

上記研究開発課題を申請し、2014年度からの5年間のSGH指定校として出発した本校にとって、国内外の注目が集まる中、指定1年目はとりわけ重要な一年と考えている。本校SGH活動では、海外交流校や立命館大学、立命館アジア太平洋大学をはじめ各高等教育機関等との連携を企画しているが、とりわけ12年間のSSH活動で、国際交流に力を入れ海外校との共同研究・課題研究を実施してきた取り組みとの相乗効果を期待され、さらには9月に校舎移転し充実した教育環

境を整備した中、その教育活動の内実が問われている。そのような情勢のなかで初年度の本校SGH活動において、以下の取り組みが実施された。

- 5月 国際ボランティアに関する特別講義を実施。ナイジェリアおよびカンボジアでボランティア活動をされてきたイギリスより来日中であったマイケル・カスタンス先生による講義を実施。
- 同 「現代社会システム」および「課題研究」の授業において、日本の貧困問題、世界の平和・災害問題に関する授業および討論を実施。
- 6月 立命館大学国際平和ミュージアム館長兼立命館

サステナビリティ学研究センター教授でもあるモンテ・カセム教授による平和と貧困に関する特別講義を実施。

同 「国際比較文化研究」および「英語ディスカッション」の授業において事前学習を経たのち、関西模擬国連 (MUN) に参加。

7月 JICA青年海外協力隊特別講義実施。シリア、アレッポのパレスチナ難民キャンプで活動された体験談をお話いただく。

夏季休暇中 東京平和研修・広島平和研修・台湾高雄平和研修の夏季三研修を実施。

9月 JICA関西開発教育支援事業取り組みの実施。アゼルバイジャン、ルワンダ、マラウイ、コートジボワール、ナイジェリア、スリランカ、ベトナムからの海外技術研修員との交流プログラム。世界の災害問題についてディスカッションを実施。

同 東京平和研修・広島平和研修・台湾高雄平和研修合同報告会実施。

同 クリストファー・ロイド氏 (イギリス 科学ジャーナリスト) 講演会実施。

なお、10月以降については以下の取り組みを予定している。

10月以降 各種講演会を実施。また、各種MUNの取り組み参加。

11月 立命館アジア太平洋大学との連携企画を実施。留学生とのディスカッション。

1月初旬 フィリピン研修実施。レイテおよびマニラをフィールドとして貧困および災害問題をテーマに、被災地におけるボランティア活動をはじめとする調査活動等。

2015年1月 阪神淡路研修 (災害問題に関するフィールドワーク) 実施。

同下旬～2月初旬 一年間のSGH活動報告会を兼ねた立命館高等学校SGH FORUMを実施。国内および海外の学校から生徒を招待して、ウインターキャンプ形式で海外生徒との共同研究・議論および発表等。

3月初旬 GLコース修学旅行実施。カナダ・バンクーバーを拠点に英語をさらにブラッシュアップする研修。

同中旬 東北研修実施。高校生徒会と連携して災害問題に関するフィールドワーク。ボランティア活動等。

なお、ここでは夏季休暇中に実施した東京平和研修、広島平和研修および台湾高雄平和研修についての実践報告をしたい。上記三研修については、対象生徒を高校2年GLコースおよび高校1年GJクラスとし、希望者を募った。各研修ともこちらの期待を大幅に上回る希望者があり、その志望理由書等を評価して選考した。そして、これらの研修実施後には、校内への発信の場として上記研修合同報告会に加え、全校生徒を対象とした国際理解講座において研修参加生徒によるプレゼンテーションを実施し、全校生徒に向けてその学んだ成果と想いを語ることで、SGH活動における学びを共有化する機会を設けている。

## (2) 東京平和研修

国際情勢の中での日本の状況を知るとともに日本にいる私たちの課題を考えることをねらいとし、夏季の研修第一弾として2014年7月16日～18日の3日間でSGH東京平和研修を実施し、15名が参加した。主な取り組みとしては、貧困問題の解決に関わる講義・ワークショップ、青年海外協力隊体験談、異文化理解ワークショップ、マスメディアの実際を知るフィールドワーク等である。主な研修先としては、独立行政法人国際協力機構 (JICA) 地球ひろば、NPO法人国際協力NGOセンター (JANIC)、朝日新聞東京本社等であった。

1日目はJANICにおいて、講師の先生による貧困問題の解決に関わる講義・ワークショップを実施した。青年海外協力隊でフィリピンに派遣され、現地の方々に新体操を教えておられた体験談を話していただいた。その後、講義ではベトナムにフォーカスして、その文化的特徴を含めて理解をしたのち、ある少年の死をめぐる事例から、その貧困の原因が一つではなく様々な要素が複雑に絡み合っていることを知り、その問題の解決策をグループごとに検討し、解決プロジェクトとして提言を作成し発表するというワークショップであった。

生徒たちはこれらを通して、私たちにできることは何か考えることや、そのためにまずは知ることそして想像してみることに、さらには世界で起きていることに興味を持つこと、そのうえで自分が知ったことを誰かに伝えることなど、今後求められる力について考え、またそれらを意見交換し共有することができた。解決プロジェクトについても積極的な意見交換を行い、具体的な提言を作成することができた。支援の方法とし

て、具体的な物質等の提供にとどまらず、諸問題を根本的に解決する方法とは何かということについて考えて提案することができ、また、細やかな目配りの利いた解決プログラムを提示することもでき、充実した内容であった。

2日目はJICAにおいて研修を実施した。前日に引き続き、青年海外協力隊に参加した講師の先生の体験をお聴きした。セネガル共和国に派遣され、現地のカウンセリングセンターでカウンセリングや感染症予防の解説、HIVの無料検査実施のサポート等の活動をされ、帰国後子供兵の社会復帰を支援したいとさらにウガンダにも行かれた体験談をお話いただいた。その中でも「現地の人に何かをしてあげるといふ感覚ではだめ。一緒にやるという感覚が大切だ」ということ、「学問は万人の幸せの為にあるので様々なことを学んでほしい」ということを力説され、それらは生徒たちの心を打ったものとなった。地球ひろばで日本の世界への援助の形態や具体的な内容をさらに学習した後、ランチとしてエスニック料理を食し、さらに新たな講師の

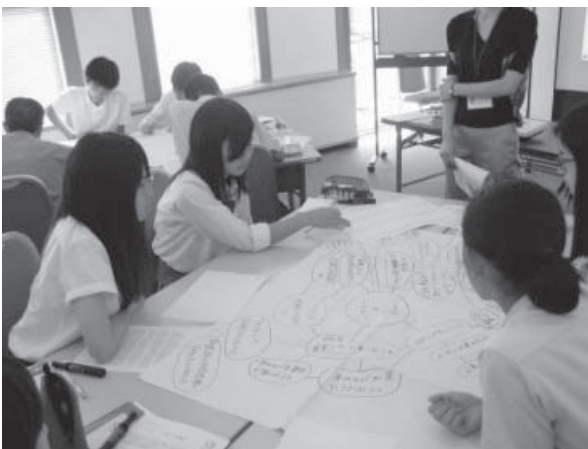
先生によるワークショップを実施した。セネガル関連の話題として「障害をもった現地の人からお金をほしいと求められたらあなたはどのようにする？」という実際に出会った事例をもとに、生徒たちが考え、グループで議論し、意見を発表しながらお互いの意識を共有した。ワークショップを通して、私たちが当たり前だと考えていることがそうではないということ、つまり異文化理解の重要性を学び、また、貧困などの社会的弱者の立場にある人々は、社会から取り残されているという疎外感や社会からの偏見に苦しんでいることを認識することができた。イスラム文化圏では持てる者が持たざる者に分け与えるザカート（喜捨）の精神が浸透しており、日本社会と比較することで見えてくることも多くあったようだった。その後予定にはなかったプログラムとして、講師の先生から青年海外協力隊員としてメキシコに行かれた体験談をお話いただいた。現地での仕事や協力者もいない、スペイン語も話せない、文化の違いに戸惑う等の壁におち当たったが、それら一つずつ誠実に地道に解決していくことで現地の人たちのために役立っているという実感を得ることができたということであった。

この日2名の講師の方が奇しくも同じことを言われていたのが印象的であった。それは、お二人が国際貢献の仕事がしたいと思ったのは、高校時代に海外留学して現地を実際に体験した際の衝撃があったからというお話である。高校生のうちに海外に触れることが、その後の人生を大きく変えるターニングポイントとなったという点について、生徒たちはこの時期に実際に体験することの重要性を実感したようであった。人生における幸福観についても、不便は不幸ではなく、また、他の人が何を持っているかは重要ではなく自分が持っている物の価値がどこにあるのか考えることが大切であるということも、今後の人生の貴重なアドバイスとなったに違いない。生徒たちは真剣に耳を傾け、国際貢献の意義についてさらに深く考えることができたようであった。

最終日は、朝日新聞東京本社を訪問した。世界中のニュースが集まる新聞社の心臓部、報道・編成局や、超高速の輪転機がフル回転する印刷工場等、実際に新聞社に入って新聞づくりの現場を体験する機会を得ることができ、将来の進路選択も視野に入れながら生徒たちは真剣に見入っていた。

### (3) 広島平和研修

国際的な視点に立脚した世界平和への想いを広島へ



東京平和研修でのグループ・ディスカッションの様子



の訪問と広島の高校生との交流を通じて獲得し体感することをねらいとし、夏季の研修第二弾として2014年7月28日～29日の2日間でSGH広島平和研修を実施し、生徒10名が参加した。主な取り組みは、広島平和記念資料館見学、国立広島原爆死没者追悼祈念館見学、被爆者講話、広島大学附属中・高等学校生徒との共同フィールドワーク（碑めぐり）等であった。

今回、現地に赴くまでに事前学習を三回持った。高校生として平和学習に臨む姿勢や、なぜ広島へ行くのか、ヒロシマとはどのようなところなのか等の学習を経て、三回目は総まとめとして立命館大学国際平和ミュージアム見学を実施した。そこで戦前のみならず戦後の国際問題における平和を脅かす要因としての戦争や紛争や民族対立等を幅広く学んだ。また、広島に行く意義として、東日本大震災後の福島第一原子力発電所について、現在ダークツーリズムとしてフクシマを保存しようという議論もあるなかで、その原点とも言える世界遺産としての広島原爆ドームの歴史的背景を学んだうえで、遺跡の保存と継承の問題について考え、また、「安からかに眠って下さい/過ちは繰り返させぬから」という文言の慰霊碑問題から、戦争における加害と被害の立場から戦争責任とは何かについて考えた。さらに、それらを現在生きている私たちはどのように受け止めればいいのかという視点、また、原爆被害は数多くの外国人の方々にも及んでおり、日本一国で完結するものではなくグローバルにヒロシマや原爆の問題を考えなければならないという視点、また、広島の現地高校生はそれらをどのようにとらえているのかという視点などを持ち、これらを踏まえて研修に臨んだ。

広島到着後、最初に広島平和記念資料館を見学した。一人ひとりがそれぞれメモをとりながら、熱心にじっくりと時間をかけて丁寧に展示物や解説などに見入っていた。2時間以上かけて原爆の実相とその被害の甚大さ、生々しさを目に焼き付け、言葉を失うほどの衝撃を受けた。それでも生徒たちは、現在に生きる人間として、また未来に対する責任として目を背けることをせず真正面から向き合っていた。その後、平和公園内にある国立広島原爆死没者追悼祈念館を見学し、原爆投下の時刻である8時15分を中央に象ったモニュメントのある厳粛な空間で静かに瞑想し、亡くなられた方々に想いを馳せた。その後、被爆者の方から体験談を聴く機会を持った。講師として講話をしていただいた被爆者の方は外国人の方で、原爆の被害による悲惨な当時の状況はもとより、そのなかでいかに前向きに

生きていくことができるのかということや、外国人差別についても赤裸々にお話しをしていただいた。戦争前夜から戦争に突入し、その後戦況が悪化する中で徐々に変化していく日常生活の様態、原爆が落とされた瞬間をまるでコマ送りされたかのような詳細な記憶による再現、広島が「なくなってしまった」恐怖など、戦争がいかに怖いものかということは何度も繰り返し説かれた。思い出すだけでも怖いと言われ、語りたくないほど残酷なその状況とそれを受け止めたところの葛藤を取ってお話いただいた。生徒たちは、終了後しばらくはすぐに立ち去ることができず、話の重みにこころとからだを委ねてしばし沈黙してしまっていた。涙を流し、それでも衝撃的なその内容を誠実に受け止めようとしていた。それと同時に、数多く受けた差別の苦しみは周囲のやさしさによって忘れることができたと言われ、人をいたわる心が平和につながると思うと涙をして語っていただいた講師の方の人柄や、その生きる姿勢に共感することができたようであった。

2日目は大変な暑さだったが、1945年8月6日はこれ以上の暑さだったかと想いを巡らせつつ、広島大学附属中・高等学校生徒との共同フィールドワークとして、平和公園を中心としてその周辺を含む碑めぐりを実施した。同校は、日本で最初のユネスコスクールに認定された伝統校であり、これまでも活発に平和教育をされてこられ、活動主体の部活動としてユネスコ班（部）をお持ちで現在51名が在籍しているということであった。今回はそのうちの16名の生徒に参加いただき、また、この日のために、平和の鐘からはじまり、原爆ドーム、相生橋、被爆アオギリ等を経て原爆死没者慰霊碑までの碑めぐりコースを考え、さらにはガイドブック冊子までも作成していただいていた。2時間以上をかけて両校生徒は、それを読みながら実際の碑を一つずつ巡り、それぞれの碑の前では広大附属生徒からの丁寧な説明があり、本校生徒たちはその話に聞き入り、実際に触れ、また広大附属生徒と意見を交わして認識を共有していた。

生徒たちにとっては、前日に資料館での見学や講話等であったその実際のものを、自らの目で見て感じるによって考えることも多かったようである。説明自体は大人の碑めぐりボランティアの方々もおられるが、自分たちと同年代の高校生から説明を聞くことの意義は大変深いものがあると考えての取り組みであった。そしてそれは、生徒たちの皮膚感覚に直に伝わってくる体験となった。碑めぐりの後、昼食をともにし、



広島平和研修の様子：平和公園内

今後の交流を約束して広島をあとにした。

#### (4) 台湾高雄平和研修

国際的な課題について海外の生徒とのディスカッションを通じて、問題意識の共有や立場の違いを越えて意見を主張し、共同して問題研究にあたることをねらいとし、夏季の研修第三弾として2014年8月23日～30日の8日間にわたってSGH台湾高雄平和研修を実施し、生徒20名が参加した。現地では、生徒一人一家庭のホームステイ形式を採り、台湾の日常生活や習俗についても実際に体験できる環境であった。主な取り組みは、本校の教育交流協定締結校である台湾の高雄市立高雄高級中学と高雄女子高級中学生徒とともに、社会的な問題について日本と台湾の高校生が共同で調査・フィールドワークを行い、さらにそれをまとめてプレゼンテーションするというサマーキャンプの形式での研修であった。高雄高級中学は化学の、高雄女子高級中学は地学のそれぞれ台湾におけるセンター校であり、サイエンス分野に特化した台湾トップクラスの教育校である。その両校が、近年社会科学への研究開

発に意欲的となるなか、本校が両校とのパートナーシップを提携し、サイエンス分野のみならずグローバルイシューについて共同調査・研究という新たなプロジェクトを継続的に立ち上げ、今後この分野で様々な研究実践ができることは今後に向けての大きな成果といえよう。

関西空港から飛行機で桃園国際空港へ。そして、台湾高速鉄道で高雄市の左營駅へ到着。ステイ先の台湾の高校生や学校関係者の歓迎を受けたのち、すぐに活動は開始された。

議論の対象となるテーマを5つに分け、本校生徒4人と高雄高級中学の生徒2人、高雄女子高級中学の生徒2人の8人グループを編成し、共同グループ活動を行った。5つのテーマは以下の通りである。

1. Transitional Justice
2. Nuclear Power
3. Underground Economy
4. Water Resources
5. Restoration from Natural Disasters

抽象的で高度な内容を含むものではあったが、本校生徒も各テーマについて事前に各自で調査もし、また台湾の生徒たちは事前に両校の生徒が2日間程度集まって活動もした上で、初日からグループに分かれて、テーマを深める討議をおこない、台湾と日本を比較するなどしながら、プレゼンテーションにまとめていく活動を行った。本校生徒は事前に校内で5回の事前学習をしていた成果もあってか、台湾の高校生とすぐに打ち解けて、活動に入っていくことができた。

台南市の史跡や博物館等を訪れて台湾の歴史的背景を学習したのち、3日目には、各グループでのディスカッションの後、高雄高級中学と高雄女子高級中学の校長先生がともに揃っての開会式が実施された。その後、台湾の高校生から高雄市内の紹介やテーマに関わるプレゼンテーションがあり、生徒たちは熱心に聞き入っていた。また、ライデン大学アジア研究国際機構(International Institute for Asian Studies) 研究員による「Sunflower Movement - An Analytic View-」と題した講演も実施された。2013年に台湾で起こった議会占拠も含め、多くの若者が政治的課題について積極的に議論し活動した一連の出来事について、様々な観点から分析的に振り返る内容であり、高校生が現代社会の課題を考える方法論として非常に有益な講演であった。

4日目は終日高雄女子高級中学で過ごした。まず、国立中山大学社会学系副教授による「Neoliberal



Globalization and Its Alternatives」と題した講演が実施された。グローバル化が進む中での資本主義経済の行き詰まりや自由主義経済の限界、また、それに代わる代替案についてのお話をいただいた。その後、校内の諸行事に参加し、生徒の自治能力や諸活動の質の高さを目の当たりにして本校生徒たちは大いに触発されたようであった。

5、6日目は、各グループでの討議を継続するとともに、グループごとに高雄市内や近隣にフィールドワークに出かける実地調査を実施した。例えばWater Resourcesがテーマのグループでは、自転車に乗り実際に高雄市内の愛河の状況を見に行ったり、Transitional Justiceがテーマのグループは「228事件」の内容をより深く知るために高雄立歴史博物館へ行ったりと、グループの討議内容を深めるための様々な活動をおこなった。また、最終のグループ別プレゼンテーションに向けて、さらにグループでの討議を重ねるとともに、PCでの作業や発表内容についての討議を三校の高校生で精力的におこなった。

7日目は各グループでプレゼンテーションに向けて



台湾高雄平和研修での様子

の最終準備をした後、午後から5つのグループのプレゼンテーションを実施した。発表時間は各20分間で、その後審査員（高雄高級中学、高雄女子高級中学、立命館高校教員）から5分間の質疑応答の時間が設定された。生徒たちは様々に工夫を凝らして、自分たちのグループの調査結果やフィールドワークの様子、感想や活動を通して考えたことなどを発表した。本校生徒たちは、プレゼンテーションにおける論理的な展開方法や説得的な技法について学び、また、研修期間中を通して取り組んできた様々なことを一つのかたちにする難しさ、言葉の真意や含意を説明する際に不可欠な語学力のハードルの高さ等を感じながらも、自己を主張し、時には協調的に振る舞うことを通して、最終的に一つの発表というかたちに結実させることができたことへの充実感、達成感を得ることができたようであった。

そして最終日。ホームステイ先の家族や台湾の友達、関係の先生方と別れを惜しむとともに再会を誓い、台湾を後にした。

## 7. 研修での成果と課題

SGH初年度の取り組みであることも意識し、それぞれの研修では基礎的な内容から応用・発展へと進む形式となっており、その分、生徒たちの意識や行動もそれと同様に理解や認識が進んだようであった。貧困や平和という問題は複雑な要素が絡み合って存在しており、一足飛びにクリアに解決できるものではないという壁にぶち当たり、生徒たちの苦悩する姿も見受けられた。

東京研修においては、異文化理解について、机上の理論ではなく私たちの日常生活に照らし合わせて考えることを突き付けられており、自分自身の考えや行動自体が問われていること、そのために自らの意見・立場を形成すること、さらには、公正公平とは何かや、善悪の価値判断の難しさ等を痛感したようであった。

広島研修においては、日本は原爆被害という視点では被害者側の立場で発想するが、外国人の被爆者の方が差別を受けたという、日本が加害者の立場として発想することで物事が従来とは異なった見え方をする。そのような複眼的な視点を持つことの重要性について考えさせられた。

台湾研修においては、語学力や国内外の社会的諸事象に関する意識というハードルがあることを改めて感じさせられたが、そのような中でも、一つのテーマに

ついて共同でフィールドワークや議論をし、異なる意見を一つに結実させるという協働活動を体験できたことは、生徒たちのその後の学びへの意欲の向上、ひいては未来へ向けての自己のありかたを考える貴重な機会となった。

世界の至るところで平和を脅かされ貧困に苦しむ人々がいて、またその解決のために多くの人々が地道な努力を続けているということ、そのような中で、私たちの置かれている状況を知るとともに、日本にいる私たちが抱えている構造的と言ってもいい物理的・心理的な課題を考えることができた。国際平和実現への道程は決して簡単なものではないが、自分たちが置かれている立ち位置や、今後どう考え、何ができるのかということをより深く考えることができた。私たちにとって、様々なことを「考える」ことは非常に大切である。しかし、それとともにその先に何等かのアクションを起こすことの重要性、現状を変えるために自らがまず一步を踏み出すということの重要性も理解することができたのではと考える。「当事者性をいかにして持つことができるか」ということ、さらには「社会的弱者に立つということの難しさ」という課題が浮き彫りにされた。そのような中で、生徒たちから湧き上がった「この想いを誰かに伝えたい」という言葉を大切に捉えたい。

## 8. 未来への願い

我が国における戦後平和教育はこれまでに様々なすばらしい実践がなされてきた。ここにそれを概観することはできないが、その平和教育の在り方については、一方で問題点も指摘されていることも事実である。一般的に言って、小・中学校段階までは修学旅行をはじめとして全国各校において平和教育は活発に実践されるが、高等学校段階になるとそのトーンは次第に下がる。その大きな要因のひとつは、大学受験という大きなハードルを乗り越えるためにカリキュラム等で時間的な余裕がなくなるということが挙げられるだろう。また、中学校段階まで積極的に取り組んできたという自負からか、それを高校で繰り返すことを避けたり、さらには中学校段階までとは異なるアプローチで実践することの難しさというものもある。また、活発であればあるほど特定の問題にだけ焦点をあててしまい、幅広く平和教育をとらえることができなくなった例も多々目にしてきた。高等学校段階での平和教育においては、人類の尊厳と命の大切さを幅広く扱うこ

とが必要と考えるが、その際に、平和教育で何がどう変わるのか、また、その変化を具体的な数値としてどう明示できるのか。これらの難問について風穴を開けるという意味で、本校がその解答として到達したのが本SGH構想であった。

当事者性を持つこと、そして、社会的弱者からの視点をもつこと。しかし、相対的に見て物理的に恵まれている本校を含む生徒の日常からは、それらを持つにはあまりにも心理的距離がありすぎる。社会科をはじめ様々な科目で実践されてきたこれまでの授業等においても、社会での格差が解消されずに不平等な状態に置かれている人々について学習し、また場合によっては実際に見聞きもするが、それらが生徒自身の当事者性を揺さぶる事態とはなっていないことが多かった。そのような中で、たとえ自ら学んだことを発信したとしても、場合によっては、それを聞く側に空疎な建前論を言っていると思われたり、発信する生徒側でさえそう考える自らを見いだす事態となっていた。この課題をどう克服し、突破するのか。誤解を恐れずに述べるなら、本校では、それを突破するためには「高校生にとって有意義な実体験を効果的に繰り返す」しかないと考えた。世界の様々な場所へ直接赴く。それが一度や二度の体験であれば、いわば一種のイベントとして生徒たちの記憶に残る程度であろう。そしてまた、その記憶も時を経るにしたがって忘却されていくであろう。しかし、一度や二度ではなく、何度でも、何度でも、実際に現地に赴き、現地の人々の声に耳を傾け、平和を脅かされ貧困や災害に苦しむ世界の状況を深く知ること。そして、その問題を解決するために自らの意見を持ち、また異なる意見を持つ人々と協働すること。そのプロセスにおいて、自らの意見がときには批判され否定されながらも妥協点を見だし合意形成に至るという体験を高校生時代に数多くさせる機会を設けること。このことが重要ではないかと考えている。そして、体験を繰り返すことによって、生徒の心に国際貢献への強い意欲の火種をともしこと。さらに、体験を繰り返すことによって、上から目線の「憐れみ」から「同情」へ、さらにはフラットな目線としての「共感」へと至ること。そして、共感はずや何らかの「行動」を産む。私たちの日常の諸活動を可能ならしめているものが、いわば「デフォルトとしての平和」によって成り立っているのではなく、これまでと現在の人類の絶えざる努力によって支えられているということ。共感を持って原理的に遡及して考えることができる生徒は、将来にわたって様々なフィールドで国際的

にリーダーシップを発揮し、あるいはパイオニアとして活躍できる人材となりうると考える。そして、現在の教育環境はそれが実現する環境になりつつあると言える。

本校では、これまで述べてきたように、国際平和の実現への貢献という研究開発課題のもと、貧困の撲滅と災害の防止・対策というテーマを扱っていく。それは、私たちが、世界の貧困問題と災害問題はリンクしていると考えているからである。現実には、貧困という問題はアジア太平洋地域においては災害と密接に関係している。例えば、アジアの貧困地域をみたとき、より貧しい人々は洪水の危険性が高い場所など、災害の起きやすい場所に居住せざるをえない状況にある。ひとたび災害が起きれば、最も大きな被害を受けるのも貧困地域の人々であり、復興の遅れもこのような人々の生活を直撃する。この一見別次元だと思われる両問題をリンクさせ組み合わせるというロジックを通して考えることで、貧困から脱却させる要素として災害を避ける（防災）という観点など、生徒たちに問題の切り口が見えてくるものと考えている。また、フィールドワークの地域としてはアジアを中心に展開していきたいと考えている。21世紀はアジアの世紀とも言われているが、アジアとりわけ環太平洋地域は経済発展が期待される地域であると同時に、地震・津波・台風・洪水などの自然災害を頻繁に受けてきた世界有数の被災地域でもある。また、一方で急速に経済的に発展してきている最貧国とは言い切れないアジア諸国内において、都市と地方という国内における経済格差の問題が浮上ってきており、このことは、これまでの貧困問題とは質的に変化が起こってきていることを示唆している。このような問題意識を持ち、また、アジアの多様性に視点をおき、今後幅広く上記研究開発課題に取り組んでいきたいと考えている。

本稿では、GLコース設置とSGH申請への思い、および指定後初年度の実践報告を中心に述べてきたが、今後本校は、この初年度の取り組みを踏まえてSGH指定の5年間はもとより10年後、いや100年後の人類にとっての明るい希望と未来を信じて歩み続けていきたい。